

読書への意欲と読書の意味づけ

— 読書量と読書に対する評価 —

吉田真弓* 長野市立朝陽小学校
川島一夫 学校教育講座

キーワード: 読書ばなれ、中学生・高校生と大学生の読書量、読書への印象尺度

目的

近年では、情報化社会における適切な情報選択能力が重要視されるようになってきた。あふれる情報に対し我々は受容的になりがちであり、ともすれば情報を鵜呑みにし、自分自身で物事を考えなくなる。という懸念がある。同時に言葉によるコミュニケーション能力の低下も、問題となっている。文化庁も、これらの能力を高めるために言語力を身につけることが大切だとしており、学校教育においては、国語教育の充実とともに読書教育の重要性を考えていかなければならないとしている。読書は、他の情報媒体と比較して身近にあり、自分のペースでじっくりと読むことができ、そのジャンルは多岐にわたる。読書は国語力の向上に重要な役割をもち、子ども時代に読書習慣をつけることは国語力を身につけるためにも重要であると考えられる。つくば言語技術教育研究所の三森(2002)は異文化の人々と円滑なコミュニケーションをするために必要な情報分析のための能力を絵本を用いて育てる具体的な方法を研究・紹介し、大きな成果をあげている。欧米では、自国の文化の継承者を育てる教育として、読書技術教育を体系的に行っており、低学年には絵本をテキストとして用いたり、高校生には課題図書を設けたりしている。米国の医学教育の現場でも「絵の分析」を臨床医の重要な資質を育むための有効なトレーニング方法として実施している。さまざまな教育の場において、絵本をはじめとする本の可能性が、海外でも期待されている。

しかし、過度の学力のための読書は「させる読書」であり、時にはそのような親や教師といった大人の姿勢が、子どもの読書離れを引き起こしている原因の一つとなっている可能性もある。また現代のように、身近な大人が読書をする姿を見ることが少なくなったことも、子どもが読書に向かうことが少なくなった要因なのかもしれない。近年、子どもの本離れが叫ばれるようになったが、平成15年6月に発表された文化庁の「国語に関する世論調査結果」によると、全世代にわたり、「全く本を読まない」と答える人がみられ、子どものみならず大人の活字離れも進んでいる。1ヶ月の読書量が1から10冊と答えた人が58.1%と一番多く、ついで全く読まないと答えた人が37.6%で、1ヶ月に1冊も本を読まない人は全体の約4割にあたる。また、毎日新聞社・社団法人全国学校図書館協議会の「学校読書調査」によると、小学校から高等学校までの児童生徒の9割前後が「本を読むことは大切である」と認識しているのにも関わらず、1ヶ月に1冊も本を読まなかった児童生徒の割合は、小学校から高校大学へと進むにつれて高くなるという結果が出ている。先の世論調査でも、読書の重要性や意義については多くの人が十分に認めている。これは、大人から子どもまで読書の意義は認識しながら、実際には読書習慣が身につけていないといった現状があるように思われる。

藤田(2001)によれば、子どもが本から遠ざかっているという事実を、もっともはっきりとした形で示しているのは、児童書の売れ行きが急激に落ちているという現象であり、80年代半ばには出版物全体の中で8~9%程度を占めていた子ども向けの本の売り上げが、80年代後半から90年度にかけて5%前後に落ち、今では3%台という状況にある。児童書は子どもが買うというよりは、大人が子どもに買ってあげるというパターンが大

* 平成15年度 信州大学教育学部 研究生

半であり、言い換えれば、大人が子どもに本を買ってあげることが少なくなったといえることができる。このような現象は、大人が本というものに対し価値を感じなくなり、そのため子どもますます本から遠ざかっているとも考えられる。秋田(1998)は子どもたちが自ら読書をするようになっていく過程には何らかの心理的要因が働いており、さらにはそうした要因を必然的に生み出す環境として、大人の役割を重要視している。子どもが読書ができるようになるには、文化的先達である大人が読書という活動へと子どもを導き、子どもが本を読む経験を積み、そこに意味を子ども自らが見出し構成していくとしている。

一方、村田(1999)によれば、読むことは「役立つ」だけではなく「楽しい」ことであり、書かれた情報を知識として取り入れるだけでは終わらず、噛み砕かれ消化されて身になるように、自分の物となっていく始め、その知識を励みにしたり糧にしたりして自分の人生のために使うことができるようになる。読むことを通して情報を自分の物とするたび、その人の内的世界が広がることによって、いろいろなできごとを許容し、自分を含めたいろいろな人々を温かく理解し、共感できる人間的な幅につながると考えている。ドロシー・バトラーは、複雑な重い障害を負って生まれてきた少女クシュラの本と奇跡的な知能の発達のかかわりを述べた「クシュラの奇跡」(1984)の中で、本は乳幼児の言語発達を促し、幼いたましいと外界との幸せな関係を気づく力を持つが、幼い子どもは自分で本を手取ることはできないため、本に触れさせてくれる大人が絶対に必要であり、大人は子ども本をつなぐ輪でなくてはならないと強調している。このように考えると、読書は個人的なものではあるが、人間関係や文化の発展にも大きくかかわる重要なものといえよう。

そこで本研究では、子どもがどのように本と出会い、自ら読書をしていくようになるのか。そこにはどのような社会的・心理的要因があるのかをさぐり、これらの要因と読書量の関係や性別や年齢との関係を調べることを探索的に検討することを目的とすることとした。

方法

(1) 質問項目作成のための予備調査

質問項目を作成するため、大学生及び大学院生 62 名(男性 8 名、女性 44 名)を対象に予調査を行ない、以下の質問を与え、回答を求めた。

質問1 読書・読み聞かせ・絵本という 3 項目から思いつくことをそれぞれ 3 つずつ自由に書いて下さい。

質問2 好きな絵本や本の書名と、その本にまつわる思い出やエピソードがあれば自由に書いて下さい。

(2) 調査対象者 公立中学校と高等学校の生徒と大学生を対象とした。対象者は中学生 106 名(男子 57 名、女子 49 名)、高校生 98 名(男子 46 名、女子 52 名)、大学生・大学院生 77 名(男子 24 名、女子 53 名)の合計 281 名。

(3) 調査期間 平成 15 年 11 月～12 月の間

(4) 調査内容 収集した資料をもとに、読書に対する意欲、意義、活動などに関する項目を考え読書に関する質問紙の作成を行なった。108 であった。作成にあたっては、実験者及び補助者の 2 名で行った。質問項目は質問紙の表紙には、「読書に対する意識や読書の意義をどう捉えているかなどの調査」である旨と、回答者の背景情報に関する質問を記載したフェイスシートをつけた。これに続いて読書や本に関する質問を記載した。項目に関しては、すべて「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「ややあてはまる」「あてはまる」の 5 階の評定で、当てはまる場所に○をつけるよう求め、回答してもらった。(付録1)

結果

(1) 質問項目の因子分析

読書に関する 108 質問項目の調査結果について因子分析を行った。1 回目の分析では多重負荷を確認す

るため、主因子法(固有値1)プロマック回転(斜交解)を行なったところ、因子間の相関が低かったため、主因子法バリマックス回転(直交解)を行った。その結果、10 因子が抽出された。(回転後の負荷量平方和の累積 37.0%)第1 因子は、「好きな本は繰り返し読む」「読書が趣味だ」など、読書を肯定的に捉え、読書を楽しみ好む傾向がある「読書ポジティブ因子」、第2 因子は、「厚い本は読む気がしない」「本を読むよりいろいろな経験をしたほうがよい」など読書に対してわずらわしく思っていたり、敬遠したりする傾向がある「読書ネガティブ因子」、第3因子は「物語を読むとその世界にいるような気持ちになることがある」「物語の登場人物の生き方や考え方に共感したことがある」など、読んだ本の内容に感化されたり主人公に共感を覚えたりする傾向がある「感情移入に関する因子」、第4因子は「作文は得意だ」「読書感想文を書くと自分の考えや感じ方を改めて知ることができる」など読書は国語の学習に役立ったり国語力に関係しているとする「学習に価値を置く因子」、第5因子を「子どもに絵本を読んでいる親に愛情を感じる」「親子で本を読み合うことは親子のきずなを深めると思う」など、本をコミュニケーションの材料として重視し、子どもの成長によいと考えている「ふれ合い重視因子」、第6因子を「泣ける話が結構好きだ」「友だちに紹介してもらった本は読んでみたくなる」など読書によって感動しやすく、他者による推薦や情報に基づいて本を選ぶ傾向がある「感動・感化因子」、第7因子は「思い出に残る絵本がある」「絵本は子どものものだ(反転項目)」など絵本に価値があると考えたり、絵本に対する思い出をもっていたりする「絵本好き因子」、第8因子は「小さい頃よく親に図書館に連れて行ってもらった」「読み聞かせを寝る前にしてもらったことがある」など家庭に読書環境が備わっていたり、幼いころ家族の働きかけがあったりした「読書環境因子」、第9因子は「ファンタジーが好きだ」「図鑑や写真集を見るのは好きだ」など、未知のものを探求したり、空想の世界に想像力や好奇心をかきたてられたりする「想像力・好奇心因子」、第10 因子は、「マンガが好きだ」「ハリーポッターシリーズを読んだ」などマスコミの情報や映像メディアの影響を受けやすいを「メディア・イメージ尺度」と命名した。

以降の分析では、以上の10 因子の項目数が異なることを考慮し、各因子の平均評定値をそれぞれの尺度得点として用いることにした。各尺度の内的整合性を求めたところ、第1尺度で $\alpha = .79$ 、第2尺度で $\alpha = .73$ 、第3 尺度で $\alpha = .83$ 、第4尺度で $\alpha = .54$ 、第5 尺度で $\alpha = .83$ 、第6尺度で $\alpha = .76$ 、第7尺度で $\alpha = .77$ 第8尺度で $\alpha = .61$ 、第9尺度で $\alpha = .63$ 第10 尺度で $\alpha = .58$ であった。この10 尺度によって、読書の意欲を支える社会的・心理的要因尺度を構成することとした。各尺度の項目は以下の通りである。(数字は項目番号)

1 読書ポジティブ尺度

- 7. 好きな本は繰り返し読む
- 9. 長編小説をよく読む
- 10. 読書をすると夢中になる
- 13. 読書が趣味だ
- 26. 読書は気分転換になる
- 31. 国語が好きだ
- 50. いやなことを忘れてたくて読書をする
- 99. いろいろなジャンルの本を読む

2 読書ネガティブ尺度

- 15. 活字の多い本を読むのは苦手だ
- 19. 厚い本は読む気がしない

- 33. 買っても最後まで読まない本がたくさんある
- 71. 本を読むよりいろいろな経験をしたほうがよい
- 78. 本を読んでいると眠くなる

3 感情移入尺度

- 4. 物語の主人公に自分を重ねたことがある
- 24. 読書をすると新しい発見がある
- 48. 物語を読むとその世界にいるような気持ちになることがある
- 54. 本を読んだ後はその本の世界にひたってしまう
- 73. 読んだ本について友だちと語り合うことがある
- 89. 読書は自分をひろげてくれると思う

92. 物語は自分たちの生きている世界の一面を表していると思う

96. 「本は友だち」だと思う

98. 生き方や考え方に影響を与えた本がある

103. 読んだ本について友だちと語り合うことが好きだ

104. 悩んだり落ち込んだりした時、関係のある本を読むことがある

105. 物語の登場人物の生き方や考え方に共感したことがある。

106. 物語に書いてあることはしょせん作り事だと思う

※

4 学習価値置尺度

11. 読書感想文は得意だ

18. 夏休みの読書感想文の宿題はなくしたほうが

よい※

43. 作文は苦手だ

44. 漢字テストは得意だ

101. 読書感想文を書くとき自分の考えや感じ方を改めて知ることができる

5 ふれあい重視尺度

20. たくさん本を読むと先生や親にほめられると思う

30. 自分が親になったら子どもに本を読んであげたい

38. 子どもに絵本を読んでいる親に愛情を感じる

49. 父親も子どもに本の読み聞かせをしたほうがよい

74. 絵本は単純だが奥が深い

102. 親が子どもに本を読んであげるの成長にとってよいことだ。

107. 親子で本を読み合うことは親子のきずなを深めると思う

6 感動・感化尺度

41. 恋愛小説が好きだ

63. 友だちに紹介してもらった本は読んでみたくな

る

65. ベストセラーといわれる本はよく読む

77. 泣ける話が結構好きだ・

88. テレビで紹介された本は読んでみたくなって買うことがある

7 絵本好き尺度

40. 絵本をもっている(一冊でも)

47. 絵本は子どものものだ※

52. 好きな絵本がある

55. 「ぐりとぐら」シリーズを読んだことがある・

94. 思い出に残る絵本がある

8 読書環境尺度

23. 新聞はよく読む

27. 小さい頃よく親に図書館に連れて行ってもらった

35. 読み聞かせを寝る前にしてもらったことがある

45. 親はよく本を読む

53. 家に100冊以上本があった(家族全体で)

64. 小さい頃、よく本を買ってもらった

76. 名作や昔話をたくさん読んだ

108. おばあちゃんやおじいちゃんに昔話をしてもらったことがある

9 想像力・好奇心尺度

3. テレビのヒーローものが好きだ

5. ファンタジーが好きだ

16. 伝記が好きだ

17. 図鑑や写真集を見るのは好きだ

37. 自分は想像力が豊かな方だと思う

66. 好奇心が旺盛だと思う

86. 冒険小説が好きだ

10 メディア・イメージ尺度

12. テレビがない生活は考えられない

29. 映画が好きだ

21. マンガが好きだ・

28. 連載ものは続きが楽しみである

59. ハリーポッターシリーズを読んだ

(2) 性差についての検討

性別によって読書や国語の好き嫌いの人数や、読書量が異なるのかを検討するためそれぞれ分析を行なった。

まず、性別によって読書が好きな人と嫌いな人(どちらでもない)の割合に差があるか、 χ^2 検定をおこなった。その結

果、人数の偏りは有意傾向であり($\chi^2(2) = p < .10 \quad V = .14$)弱い連関がみられた。残差分析を行なった結果、表1にみられるように、男女とも読書が嫌いと答えた人の残差が有意傾向($p < .10$)であった。女子の読書が好きと答えた人の割合が有意であり($p < .001$)、女子は読書が好きな人数の割合が高いことが確認された。(表1)

次に、性別によって小学校のとき読書が好きだった人と嫌いだった人の割合に差があるか、 χ^2 検定を行なった。その結果、人数の偏りは有意であり($\chi^2(1) = p < .001 \quad \phi = -.38$)連関は中程度であった。このことから、男子は小学生のとき読書が嫌い、女子は読書が好きだった人の割合が高いことが確認された。(表2)

次に、性別によって国語の好きな人と嫌いな人の割合に差があるか、 χ^2 検定を行なった結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2(1) = p < .001 \quad \phi = -.23$)。男女別の1ヶ月の読書量については、t検定の結果、男女の平均冊数に有意差は見られなかった($t(277) = -1.34 \quad p > .10$)。

表1 男女別読書の好き嫌いの集計表

	男子(N=125)		女子(N=154)	
	度数	(残差)	度数	(残差)
好き	68.00	-2.24	104.00	2.24*
嫌い	26.00	1.91 [†]	19.00	-1.91 [†]
どちらでもない	31.00	0.93	31.00	-0.93
	[†] p < .10	*p < .05	**p < .01	

表2 男女別小学生時代の読書の好き嫌いの集計表(人)

	男子	女子	合計
好きだった	45	111	156
嫌いだった	80	40	120
合計	125	151	276

表3 男女別国語の好き嫌いの集計表(人)

	男子	女子	合計
国語好き	71	119	156
国語嫌い	55	34	120
合計	126	151	276

(3) 男女別尺度得点の比較

次に男子と女子では尺度得点の平均に差があるのかを検討するため、t検定を行なった。その結果、第1尺度「読書ポジティブ尺度」第3尺度「感情移入尺度」、第5尺度「ふれあい重視」、第6尺度「感動・感化尺度」、第7尺度「絵本好き尺度」、女子の平均が有意に第8尺度「読書環境尺度」については高いことが示された($p < .05$)。

表4 男女別の平均値(標準偏差)とt検定の結果

	男子(N=127)		女子(N=154)		t値
	平均値(標準偏差)	平均値(標準偏差)	平均値(標準偏差)	平均値(標準偏差)	
読書ポジティブ	2.96	0.78	3.39	0.84	4.44**
読書ネガティブ	2.99	0.95	2.90	0.91	0.81
感情移入	3.01	0.67	3.37	0.59	4.76**
学習価値	2.95	0.53	3.01	0.53	0.93
ふれあい重視	3.34	0.76	4.00	0.61	7.98**
感動・感化	2.66	0.86	3.55	0.89	8.49**
絵本好き	3.04	0.95	3.78	0.69	7.34**
読書環境	2.92	0.81	3.25	0.75	3.52*
想像力・好奇心	3.31	0.72	3.21	0.66	1.27
メディア・イメージ	3.86	0.78	3.93	0.74	0.76
	[†] p < .10	*p < .05	**p < .01		

第2尺度「読書ネガティブ尺度」、第4尺度「学習に価値を置く尺度」、第9尺度「想像力・好奇心尺度」、第10尺度「メディア・イメージ尺度」の4尺度については、有意な差はみられなかった($p > .10$)。

(4) 年齢差の検討

読書量の平均が年齢や性別によって異なるか

1ヶ月に読む本の平均冊数が、中学生、高校生、大学生それぞれ男女別で、異なるかどうか、2要因の分散分析による検定をおこなった。その結果、交互作用は有意ではなかった($F(2, 273) = 2.08$ $p > .10$ $Mse = .12.07$)。性別の主効果は有意傾向であり($F(1, 273) = 2.98$ $p < .10$)、男子よりも女子の1ヶ月に読む本の平均冊数が多いといえるだろう。年齢の主効果は有意であり($F(2, 273) = 12.53$ $p < .01$)、テューキーのHDS法による多重比較の結果、高校生と中学生、高校生条件の平均値の間にそれぞれ $p < .01$ で有意が示された。1ヶ月に読む本の平均冊数が順に、高校生 < 中学生 < 大学生と高くなることが示された。

表7 年齢と性別による読書量の程度

	中学生		高校生		大学生	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
男子	3.34	4.38	0.95	2.98	1.65	.1
女子	3.45	4.36	1.01	1.69	3.74	3.78

表6 中・高・大学生の男女の人数(人)

	中学生	高校生	大学生
男子	57	46	24
女子	49	50	53

(5) 尺度の相関について

1ヶ月の平均読書量を基準変数とし、「読書ポジティブ尺度」、「読書ネガティブ尺度」、「感情移入尺度」、「学習に価値を置く尺度」、「ふれあい重視尺度」、「感動・感化尺度」、「絵本好き尺度」、「読書環境尺度」、「想像力・好奇心尺度」、「メディア・イメージ尺度」を説明変数として相関を調べた。その結果、読書量と負の相関が見られたのは、「読書ネガティブ尺度」であった。

説明変数間の相関を見ると、「読書敬遠尺度」は「学習に価値を置く尺度」「ふれあい重視尺度」「絵本好き尺度」以外のすべての尺度と弱い負の相関が見られた。また、「読書好意的尺度」と「読書敬遠尺度」「感情移入尺度」、の相関が .50 を超

え高くなっている。これは「好意」は裏返せば「敬遠」ということになるためであろう。また、本を意欲的に読むとのめり込んでしまい、感情移入してしまう人が多いと考える。そこで多重共線性を考慮し、この中から複数の尺度と相関の高かった、「読書ポジティブ尺度」、「読書ネガティブ尺度」をそれぞれ削除し、重回帰分析を行うことにした。

表8 記述統計量

	平均値	標準偏差	N
読書量	2.48	3.65	279
読書ポジティブ	3.20	0.84	279
読書ネガティブ	2.94	0.93	279
感情移入	3.21	0.66	279
学習に価値を置く	2.98	0.53	279
ふれあい	3.70	0.75	279
感動・感化	3.16	0.97	279
絵本好き	3.45	0.90	279
環境豊富	3.10	0.80	279
想像力・好奇心	3.26	0.69	279
イメージ	3.89	0.76	279

(6) 1ヶ月当たりの読書量に影響を及ぼす要因について

1ヶ月の読書量に影響を及ぼす要因を検討するため、1ヶ月の平均読書量を基準変数とし、「感情移入尺度」、「学習に価値を置く尺度」、「ふれあい重視尺度」、「感動・感化尺度」、「絵本好き尺度」、「読書環境尺度」、「想像力・好

奇心尺度」、「メディア・イメージ尺度」を説明変数として全体の人数と、中学生・高校生・大学生別に重回帰分析を行なった。

表9 読書量と各尺度との相関行列

読書量	ポジティブ	ネガティブ	感情移入	学習価値	ふれあい	感動・感化	絵本好き	環境豊富	想像・好奇心	イメージ	
読書量	1.00										
ポジティブ	0.47	1.00									
ネガティブ	-0.40	-0.52	1.00								
感情移入	0.21	0.59	-0.19	1.00							
学習価値	0.12	0.19	0.10	0.31	1.00						
ふれあい	0.01	0.26	0.09	0.42	0.15	1.00					
感動・感化	0.07	0.41	-0.02	0.44	0.09	0.39	1.00				
絵本好き	0.19	0.32	0.01	0.30	0.25	0.37	0.31	1.00			
環境豊富	0.25	0.34	-0.06	0.37	0.21	0.40	0.24	0.48	1.00		
想像・好奇心	0.17	0.35	-0.11	0.44	0.19	0.12	0.27	0.17	0.25	1.00	
イメージ	0.04	0.21	-0.05	0.18	0.09	0.05	0.35	0.13	0.15	0.33	1.00

まず全体の人数とで、読書量との重回帰分析を行なった。その結果 R^2 は有意であった。

($R^2 = 0.90$, $F(270,8) = 4.45$, $p < .01$)変数との標準偏回帰係数が有意であった説明変数は「感情移入尺度」、「ふれあい重視尺度」、「読書環境尺度」、であり、これらの説明変数が、読書量に影響を及ぼしているといえる。変数の平均と標準偏差は以下の通りである。

表11 中・高・大学生における各条件の平均と標準偏差

	中学生(N=106)		高校生(N=96)		大学生(N=77)		全体(N=279)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
読書量	3.39	4.35	0.98	2.38	3.08	3.33	2.48	3.65
感情移入	3.28	0.61	2.88	0.66	3.51	0.53	3.21	0.66
学習価値	3.02	0.52	2.87	0.55	3.07	0.48	2.98	0.53
ふれあい	3.50	0.70	3.61	0.84	4.10	0.54	3.70	0.75
感動・感化	3.33	0.95	2.94	1.07	3.19	0.84	3.16	0.97
絵本好き	3.61	0.85	3.12	0.99	3.65	0.72	3.45	0.90
環境豊富	3.10	0.84	2.89	0.81	3.36	0.65	3.10	0.80
想像・好奇心	3.35	0.65	3.09	0.79	3.34	0.56	3.26	0.69
イメージ	4.29	0.58	3.75	0.74	3.52	0.75	3.89	0.76

(7) 読書ポジティブ尺度に及ぼす要因について

読書をポジティブにとらえる心理的要因を検討するため、読書ポジティブ尺度を基準運変数とし、「感情移入尺度」、「学習に価値を置く尺度」、「ふれあい重視尺度」、「感動・感化尺度」、「絵本好き尺度」、「読書環境尺度」、「想像力・好奇心尺度」、「メディア・イメージ尺度」を説明変数として全体の人数と、中学生・高校生・大学生別に重回帰分析を行なっ

た。その結果、すべての年齢で R^2 は有意であった。(中学生 $R^2 = 0.90$, $F = (97,8) = 4.45$, $p < .01$ 、高校生 $R^2 = 0.90$, $F = (87,8) = 4.45$, $p < .01$ 、大学生 $R^2 = 0.90$, $F = (68,8) = 4.45$, $p < .01$)。変数との標準偏回帰係数が有意であった説明変数は「感情移入尺度」、「ふれあい重視尺度」、「読書環境尺度」、であり、これらの説明変数が、読書量に影響を及ぼしている確認された。

表15 読書ポジティブ尺度を基準変数としたときの分析結果

	中学生(N=106)	高校生(N=96)	大学生(N=77)
	偏回帰係数	偏回帰係数	偏回帰係数
感情移入	0.33**	0.44**	0.44**
学習価値	-0.06	0.15	-0.07
ふれあい	0.25**	-0.31**	-0.13
感動・感化	0.15	0.24*	0.12
絵本好き	-0.08	0.18 [†]	0.08
環境豊富	0.01	0.10	0.29**
想像・好奇心	0.04	0.00	0.25**
イメージ	0.06	0.07	-0.12
決定係数	0.34**	0.47**	0.48**

表13 読書量を基準変数としたときの分析結果

	全体(N=279)
	偏回帰係数
感情移入	0.16*
学習価値	0.02
ふれあい	-0.18**
感動・感化	-0.02
絵本好き	0.11
環境豊富	0.21**
想像・好奇心	0.07
イメージ	-0.04
決定係数	0.12**

表14 読書量を基準変数としたときの分析結果

	高校生
	偏回帰係数
感情移入	0.12
学習価値	0.11
ふれあい	-0.33**
感動・感化	-0.06
絵本好き	0.16
環境豊富	0.15
想像・好奇心	0.19
イメージ	-0.05
決定係数	0.19*

(8) 年齢別、1ヶ月の読書量に及ぼす要因について

次に、年齢によって、1ヶ月の読書量にどのような違いがあるのかを検討するために、重回帰分析をおこなった。その結果、高校生においてのみ有意であった。($R^2 = 0.19$, $F(8,87) = 2.57$, $p < .05$)変数との標準偏回帰係数が有意であった説明変数は、「ふれ合い」であった。

考察

(1) フェイスシート項目と個々の質問項目の分析

- ・「国語が好きですか」という問いに対し「はい」答えた生徒は、中学生 71.7%、高校生 64.3%、大学生 66.2%であり、全体的に国語が好きと答えた生徒が嫌いと答えた生徒の割合を上回った。

- ・ 1ヶ月の読書量は、1冊と答えた生徒が一番多く31.1%、1冊も読まない生徒は1.9%であった。中学校、高等学校で朝の読書活動に取り組んでいるため、1冊も読まない生徒が少なくなっていると思われる。
- ・ 本を読まない理由として、「時間がない」、「他のことに興味がある」、「面白い本が見つからない」といった意見が多かった。「時間がない」と答えた生徒のほとんどが学校の勉強が忙しいためとしている。中学・高等学校は受験を控えているため、学習に費やす時間が読書時間に影響を及ぼし、ゆっくりと読書に取り組むことができないのであろう。
- ・ 「幼いころ家族から絵本や昔話の読み聞かせをしてもらったことがあるか」という問いに対しては77.4%の生徒が「ある」と答えている。読み聞かせをもらった人は、母親が44.3%ともっとも多かった。また、その他の内訳を男女別に見ると祖母、姉、といった女性がほとんどであり、家族の中では女性が昔話や絵本の読み聞かせを行なう役割を担っているといえる。
- ・ 「家族以外の、教師や図書館員などに読み聞かせをしてもらったことがあるか」という問いに対しては89.6%の生徒が「ある」と答えており、読み聞かせは読書指導の一環として一般的に教育現場で行われているといえる。
- ・ 「小学生の頃は本をよく読んだのに、今はめっきり本を読まなくなりましたか」という問いに対しては、82.1%の生徒が「いいえ」と答えている。中学、高校、大学と年齢が上がっていても、小学生の頃に読書が好きだった児童生徒は読書習慣が身につけているといえよう。
- ・ Q5「ファンタジーが好きだ」の問いに、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた生徒は全体の約60%であった。これは、ハリーポッターシリーズの影響もあると思われるが、ファンタジーが全体として好まれているようである。
- ・ Q10「読書をすると夢中になる」の問いに、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた生徒は全体の約70%であり、負の方向に大きく偏った分布となった。読書が好きでなくても、本を読み出せば夢中になるようだ。
- ・ Q30「自分が親になったら子どもに本をよんであげたい」の問いに「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた生徒は全体の約70%、Q38「子どもに絵本を読んでいる親に愛情を感じる」の問いでは約67%、Q102「親が子どもに本を読んであげるのは成長にとってよいことだ」の問いでは74.4%の生徒が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えており、ともに大きく負の方向に偏った分布となった。これは読書や絵本の価値を感じている結果であろうと思われる。
- ・ Q87「読書をする国語の力がつくと思う(読解力)」の問いに「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた生徒は全体の約76%になり、読書は国語力と関係があると感じている生徒が多いことが伺える。

(2) 性差について

男女とも、読書好き・国語好きの人数が多かったが、男子に比べ女子の方が、読書好き・国語好きな生徒の割合は高かった。活字を追うことや時間をかけて向き合わなければならない読書はある意味労力が必要である。これに対し、現在の子どもたちには、テレビゲームやインターネットなど、スイッチ一つで手軽に楽しい・面白いと感じることができる刺激に囲まれ、これらを好む傾向がある。特に男子は、読書が嫌いではないがそれよりもサッカーやドッジボールなど体を動かしたりゲームをしたりすることを特に好むため、結果に男女差がみられたのではないかと考える。また、国語離れ、国語嫌いも叫ばれることが多いが、今回の結果からは国語は好きと答えた生徒が多かった。これは、調査をお願いした学校の国語の担当教諭が生徒たちの興味関心を引くような指導をしていることが影響しているとも考えられる。しかしこの点に関しては、① 国語が好き → 読書が好きになった ② 読書が好き → 国語が好きになった、という二つの方向が考えられる。また、相乗効果により双方の意欲が高まった可能性もある。これらについては、さらに調査、検討が必要である。

(3) 男女別尺度得点の平均について

女子は男子に比べ、読書によって感動したり感化されやすい傾向がみられた。また、心の変化、コミュニケーション、

を重視していると考えられる。家族や周囲の人々に読み聞かせをしてもらったり、図書館へ連れていってもらったりするといったことには、本や昔話に触れるというだけでなく、コミュニケーションも存在する。本があるだけではなく、そこに人間的な関わりがあることも、女子では読書へ向かうきっかけになっていると思われる。男女とも学習に価値を置くが一番低いことから、勉強のためと考えて読書に取り組んだり、知識を得るために読書しようという意識はないようである。知識の獲得や、国語の勉強のために読むことは当然あり、必要でもある。しかし大人が本を与えるとき、どうしても成績の向上や道徳的価値を与えるようとする側面が強くなる。これでは読書の楽しみを奪ってしまう危険がある。個々がそれぞれの思いで自由に本の世界を楽しむことが想像力を育て多様な考え方を享受し尊重する基盤を作るのではないかと思う。そしてまず大人が読書を十分に楽しみ、その姿を子どもが見ることも大切であると考え。

(4) 年齢差について

高校生の男子では、1ヶ月に読む本の平均冊数が1冊を切るという結果になった。また女子も1.01冊と1冊をわずかに上回った程度であった。大学生の男子も1.65冊と低い値となった。中学生は高校受験を控えているため、読書に取り組む時間よりも学習のための時間が必要となり、読書量が減少するかと予想した。しかし、予想に反し高校生になると読書量が減り、また大学に入ると本を読むようになるようである。高校生になると、校則が自由になったり、受験勉強から解放され、様々なものへの興味が広がったりする時期であることも影響しているのではなかろうか。また、学校での読書指導の度合いや、高校や大学生の学力レベルも関係していると思われる。どのような環境で生活しているのかということも加味し、調査することも必要であろう。

(5) 読書量・読書がポジティブについて

全体としては、読書量は本の主人公の行き方に感動したり、考え方に影響されるなど、その本の内容に感情移入することが、本を身近にしたり、さらに読書を推進する要因であるといえるであろう。また、小さな頃の読書環境がとどろいていたり、周りの大人たちが、読み聞かせをしたり、本を与えたり、図書館へ連れていったりするといった読書への働きかけがあったことも影響しているといえる。

年齢別に見ると、読書量に大きく影響している尺度は見られなかったが、高校生では、「ふれ合い重視尺度」がマイナスの影響を与えているという結果になった。現代の高校生は、同世代の友人との関係を重視し、非常に狭い人間関係の中で自分の存在を見付けようとしている。そして、高校卒業後は、進学と社会に出る生徒と進路が分かれる時期でもある。まだまだ子どもでいたいけれど、現実はまだそこまで来ている状況の中で、大人や社会への反発も大きい。いわゆる青年前期前期のモラトリアムにあたる。そのため、「ふれあい」は、大切だとわかっていても、自分にとっては「煩わしいもの」と感じているのではないかと考える。また、中学生、大学生では、影響を及ぼしている尺度に有意な差がみられなかった。読書量は内的な動機によって左右されるだけでなく、もっと別の要因が働いていると考えられる。中学校では、受験を控えある程度興味や関心ごとに抑制がかかるが、高校後の進路は、大学進学だけではなく、就職という道もあり、押さえられていた欲求をいろいろと満たそうという気持ちも大きい。そのため、読書という活字を追う手間のかかる活動よりも、安易で快感度の高い物へと走ってしまうのではないかと考える。また、どのような本を読んでいるのかといった質的な問題もある。分厚い長編小説でも、短時間で読める雑学新書、古典文学、娯楽小説、同じ1冊でも、読む時間には大きな差が出てくる。このような点も考慮し、調査する必要があるだろう。

まとめ

幼い頃から読書環境をどのように与え整えていくのが、その後の読書生活を左右しているため、学校教育だけでなく、家庭や地域がそれぞれの場で、自ら本を読むという子どもをどう育てていくのかを考えていかなければならない。また、さらに信頼性の高いデータを得るためには、社会人、大学別、学部別など、様々なサンプルによる調査が必要であ

る。読書の意欲は冊数だけで決まるのではない。質的なものも考慮する必要がある。

小・中学校で培ってきた読書生活が途切れてしまったり、消えてしまわないために、この壁を乗り越えたり、あるいは一時的に興味が離れてもまた再び読書を身近な楽しいものとして感じるための要因は何か。また、小・中学生の子どもの読書離れは、塾、習い事等による生活の質的变化、他のメディア(テレビ・ビデオ)ゲーム、インターネットなどとの関係も考えられるので、今後は、読書に対し壁になっている要因を明らかにするとともに、親の意識、生活環境、社会状況の変化、発達段階などとの関係をさらに詳細に調査し、現場で子どもの実態を捉えながら、具体的な読書指導はどうあったらよいか研究していきたい。

引用文献

- 藤田のぼる(2001) 児童文学への3つの質問 てらいんく
秋田喜代美(1998) 読書の発達心理学 国土社
村田夏子(1999) 読書の心理学 サイエンス社
ドロシー・バトラー(1984) クシュラの奇跡 のら書房
三森ゆりか(2002) 論理的に考える力を引き出す② 絵本で育てる情報分析力 一声社
福沢周亮(1991) 子どもと本の心理学 大日本図書

(2004年4月23日 受理)